

コラム
2

スポーツ視聴とネット配信



立教大学社会学部メディア社会学科教授 是永 諭

海外における日本出身のスポーツ選手の活躍が連日のように報道され、話題となる中で、人びとにおけるスポーツ視聴への関心の高まりが期待される。一方で、ネット配信と動画視聴の普及を背景に、リアルタイムでのスポーツ視聴も、場所と条件を選ばずに自由に行うことが可能になって来ている。

こうした中、スポーツ視聴の現状と、そこにおけるネット配信の位置づけはどのようなものになっているだろうか。本稿では近年の調査データを組み合わせて検討しながら、この点を確認していきたい。

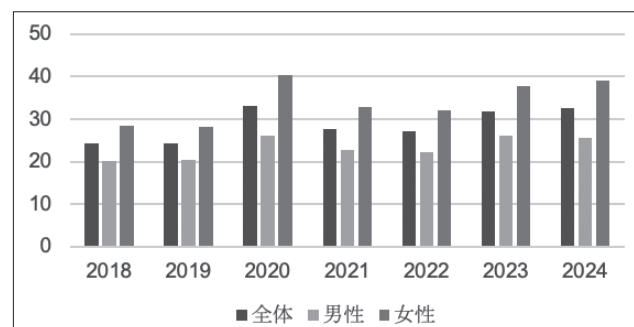
1. スポーツ視聴の現状

スポーツ庁が2018年から年度ごとに実施している4万人（2021年までは2万人）を対象とした「スポーツの実施状況等に関する世論調査」では、テレビとインターネットによるスポーツ観戦経験を、種目ごとによる複数回答で集計している。この設問について、どのスポーツ種目も「見なかった」という回答の推移を表したのが図表1である。

この結果によれば、2019年度までは「見なかった」という比率は25%に満たなかったのが、2024年度では32.5%となっている。特に女性は男性に比べてその比率が高く、2024年度では39.1%であった。この傾向からすると、スポーツ視聴への関心はむしろ低下しているともいえる。なお、現地でのスポーツ観戦の経験については2024年度で「見なかった」が全体で73.6%である

が、この数値には2018年度以来大きな変動はない。

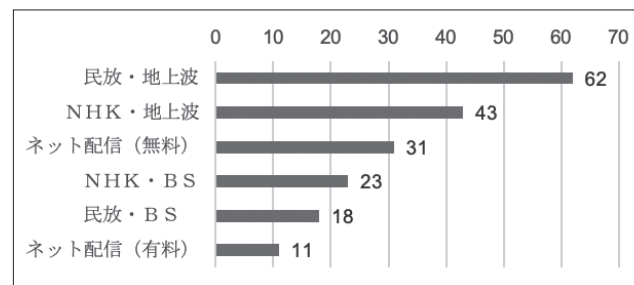
図表1 年度ごとのスポーツ視聴の動向（見ない人の割合、%）



出所：各年度の「スポーツの実施状況等に関する世論調査」の集計表より作成

2. ネット配信によるスポーツ視聴

図表2 スポーツ視聴者における視聴手段（複数回答、%）



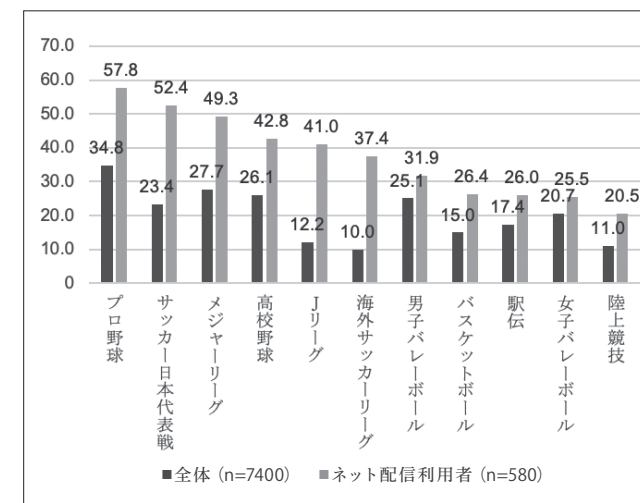
出所：NHK放送文化研究所より

では、スポーツ視聴の中でのネット配信の位置づけはどのようなになっているだろうか。NHK放送文化研究所による2400人のス

ポーツ視聴者を対象とした調査^[1]の結果から、各視聴手段の割合を示したものが、図表2である。地上波のテレビ放送が中心的な手段となっており、ネット配信は31%と地上波に次ぐ位置を占めるが、有料の場合は11%にとどまっている。

次に、TBS生活DATAライブラリのデータから、スポーツの視聴を目的にネット配信（無料を含む）を利用している人と、全体についてそれぞれ「中継・番組を見たいスポーツ」を種目ごとに見たものが図表3である。

図表3 見たいスポーツ中継・番組の割合（%）



出所：TBS生活 DATAライブラリのデータより筆者が作成

コラム2

スポーツ視聴とネット配信

図表3に掲載の種目はいずれも全体の中で関心が高いものであるが、スポーツ視聴目的のネット配信利用者においては、いずれの種目についてもさらに高い関心が見られている。一方で、男女のバレーボールについては、全体の関心とネット配信利用者の関心との差が小さく、また掲載のないフィギュアスケートは全体の関心が配信利用者の関心を上回っている。これらの種目はいずれも女性の関心が比較的高いもので、スポーツ視聴を目的としたネット配信利用者に男性が多く(79.8%)、女性がテレビによって視聴する傾向が高いことから、こうした種目による関心の差が出ていると考えられる。

3. スポーツ視聴の今後に向けて

以上のデータから、スポーツ視聴の現状として、全体の関心は低くなっている傾向を示すものの、男性を中心とした関心の高い層では、ネット配信を通じてさらに多様なスポーツへの関心が維持されている可能性がうかがえる。その一方で、これまで主に地上波のテレビ視聴を通してスポーツと関わりをもっていた女性を中心とした層については、視聴環境の変化から、関心を維持しにくくなっている可能性も考えられる。

スポーツ観戦はシニア層の趣味としても比較的高い割合で選択されており^[2]、生涯にわたり持続される可能性をもつものである。インターネットの活用により、野球やサッカーといった男性的な性格の強いスポーツ以外にも、積極的な視聴を支えるための環境が

整備されることも1つのカギとなるだろう。より多様なスポーツへの関心が幅広く維持されるために、今後もデータによる検討が続けられる必要がある。

■注-----

[1] 齊藤孝信「スポーツ分野におけるメディアの公共的役割ー2024年11月「スポーツコンテンツ視聴者2400人へのWebアンケートからー」『放送研究と調査』2025年5月号、2-31ページ。

[2] 『モバイル社会白書 2024-2025』資料8-25より。